

# 薬史学会通信

No.23 1996年10月

☎113

東京都文京区弥生2-4-16

(助)学会誌刊行センター内

日本薬史学会事務局

Phone (03) 3817-5825

FAX (03) 3817-5830

日本薬史学会

共催：日本薬剤師研修センター

## 秋季講演会のお知らせ

と き：11月9日（土） 13時30分～17時

ところ：昭和薬科大学\*

### 特別講演

「江戸時代における薬の携帯とその容器」

小西製薬㈱

服部

昭氏

江戸時代に広く使われた薬の携帯容器、特に印籠を中心に解説する。

「ツェンペリーの来日と日本への貢献」

日本薬史学会

高橋

文氏

スウェーデンの医師・植物学者 日本に西洋医学を伝え、日本の動植物を世界に紹介

### 博物館・史蹟めぐり

「中富記念くすり博物館紹介」

館長

中富たつ子氏

1995年3月に久光製薬㈱が佐賀県に開館した、わが国二番目のくすり博物館の紹介

「第5回医薬史蹟を訪ねる旅（中国）」

北京－杭州－西安－成都－上海、中国各地の医薬史蹟をめぐる旅の報告

入場無料・来聴歓迎・薬剤師集合研修認定制度対象（2単位）

### \*昭和薬科大学

東京都町田市東玉川学園3丁目

徒歩：小田急線「玉川学園前」より約20分

バス：小田急「町田バスセンター」より

12：15発

JR横浜線「成瀬」より

12：39、12：54発

タクシー：町田～約1,400円

成瀬～約800円



## 北里柴三郎記念館見学

末廣 雅也

阿蘇山の雄大な景色と併せて北里柴三郎記念館を訪ねる旅を計画して5月下旬に熊本空港に降り立った。杖立温泉行の特急バスとうまく接続したことと時折雨のぱらつく曇天で阿蘇五岳もはっきり眺められないので小国町まで直行して「岳の湯」行の小型バスに乗り替えた。国道212号から離れて杉林の山の間の道を幾曲りかしてやや眺望の開けた盆地のバス停が北里記念館前で、ゆるやか坂を上ると素朴な門柱の脇に受付がある。

この記念館は北里学園創立25周年の記念事業として昭和62(1987)年に、ご生家の修復と北里文庫の建物に北里先生ゆかりの遺品、資料に解説つきの展示が完成し、貴賓館(と言っても贅を尽くしたものではなく質素な木造建築)と合わせて小国町に寄附されたものである。

北里文庫はその昔の村役場を想わせるような木造洋風の平屋建築で大正5(1916)年に先生が私財1万円余を投じて郷里の青少年に贈ったもので120㎡で、当時は熊本の県立図書館につぐ大図書館であったと案内に記されている。後ろに防災、防湿に配慮された土蔵造りの書庫が渡り廊下で続いている。その手前の廊下の一隅に置かれた書棚が図書館の名残りを留めている。

玄関に入って直ぐ目についたのは家紋の入った漆塗りの陣傘であった。これは北里家がこの地で代々総庄屋を勤めていたことを物語っている。北里先生は当地が肥後国(阿蘇郡)小国郷北里村と言われた嘉永5(1852)年に生をうけられた。6歳より寺小屋に通い、11歳より儒者の塾で漢学、武芸に励まれ、明治2(1896)年に熊本の藩校時習館に入寮したが、翌年廃藩置県のため藩校は閉鎖された。北里(以下敬称略)は政治家を志したが両親の勧めで明治4(1971)年、医学所病院(翌

年熊本医学校と改称)に入学した。御両親の写真、この時代の御両親へ宛てた毛筆の手紙が展示されている。

明治4年にマンズフェルトが長崎より熊本医学校に着任した。オランダ語の上達の速かった北里はマンズフェルトの講義を通訳する助教を勤めるなど彼の信頼を得て、熊本医学校卒業後は東京医学校に進学し更にヨーロッパ留学を目標とするよう励まされた。しかし明治7年マンズフェルトが辞任したので北里も退校して上京し翌年東京医学校に入学した。

時恰も学制改革が行われ、東京医学校は東京開成学校と合併して東京大学医学部(明治10年)となった。明治16年10月授与された卒業証書が展示されていた。この当時修業課目と試業委員の署名が証書紙面の半ばを占めている。生理学の大澤謙二教授のほかは外人教師のサインがみられた。ドイツ人医師のDr.E.Disse, Dr.J.Scriba, Dr.E.Baelzと薬剤学担当の製薬学科のオランダ人教師J.F.Eykmanであった。

卒業に当たって三宅秀医学部長(卒業証書に署名捺印)に進路を訪ねられた時、衛生局に入りたいと述べたところ、長与専齋局長に逢うことを推められて奉職した。明治17年、熊本医学校、東京大学の先輩である緒方正規(1835~1919)がドイツより帰朝し東大教授となったが、衛生局東京試験所兼務となった。長与局長は北里をその助手に推薦した。ここで緒方がドイツより齎した細菌学の手技を北里は身につけて明治18年には矢次ぎ早やに業績を挙げた。4月には飼養されていた家鴨が多数斃死したのを解剖して鶏コレラ菌が原因であることを証明した。9月にはコレラ流行があった長崎に派遣されたがコツホの原著に従って患者便中にコツホ氏コンマバチルスを確認してその純粹培養にも成功した。

この年内務省では衛生学の習得に中浜東一郎(福井県病院長)の逸流派遣を内定してい

たが、疾病糾明に貢献した北里を推す声も上がってきた。長与局長、石黒軍医監（内務省衛生局次長兼務）の努力が山県有朋内務卿を動かして、中浜、北里は相携えて11月に旅立った。展示されている辞令には「衛生学上取調シテ独逸国へ差遣候事」と毛筆で記されている。前年の「内務省御用掛申付候事」の辞令とともに近代国家形成にひたすら前進した明治という時代が感じられた。

明治19年1月、緒方教授よりのコツホの高弟レフレル宛の紹介状をもった北里はベルリン大学衛生学教室に入門した。ベルリンでの北里の勤勉さはレフレルをして「独逸人にも彼程の勉強家は少ない」とコツホに伝えられた。

明治20年7月、石黒陸軍省医務局長（内務省衛生局員兼務）はベルリンを訪れた。石黒を迎えた在独留学生18名の記念写真が展示されている。石黒は北里がコツホの許での研究生生活が1年半となったので、ミュンヘンのペッテンコーヘルについている中浜と交替せよと北里に命じた。これに対して北里は「細菌学は最新勃興の学問で門外漢の窺知すべからざるもので、1、2年の短時間を以て充分に学び得るものではなく、中浜が此処へ転学して来ても恐らく中途半端で困るに違いない」と答え、命に応じようとしなかった。石黒が北里を説得する席には森林太郎軍医も同席していた。森は明治17（1884）年に独逸留学の命を受け、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンの各地で修学した後、4月以来既にベルリンに在って北里と共にコツホを訪ね従学の約を結び、コツホの研究所に入っていた。石黒と北里の激論を觀て驚いた森は北里を別室に拉して忠告してその場をとりなしたことが「北里柴三郎傳」にも詳しく記されている。森は石黒に実状を説いて納得させた上、その夜直ちに北里の下宿を訪ね、「此の地での勉学の継続を改めて石黒に依頼するのがよい」と忠告した。森の忠告に従って北里は翌

日石黒の宿を訪れた。その後石黒はコツホに逢って北里の研究成果と努力を聞き諒解した。

9月26日～10月2日、ウイーンで第6回萬国衛生會議が開かれた。日本政府代表としての石黒に、北里、中浜が随行出席した。

明治22（1889）年に破傷風菌の純粋培養に北里は世界で始めて成功した。北里考案の装置で水素ガスを発生させるキップの装置、ガス洗浄瓶に繋がれた「北里の亀の子」シャーレとありふれた器材を組み立てたものである。北里を成功に導いたのはゲラチンの穿刺培養で破傷風菌が下深部の空気に触れぬ処での発育を觀察したことに基づいている。北里の論文の筆稿と成功を報じた4月28日付のBerliner Tagesblattや当時の実験室での写真も飾られており最も心を打たれた展示であった。純粋培養から菌の毒素の証明と抗毒素の発見という免疫血清療法の基礎が極めて短期間に創り上げられた。

ジフテリア菌の研究を担当していたベーリングはコツホの指示に従って北里の実験方法に則りジフテリアの免疫療法に関する研究を行なった。その結果は1890年のDeutsch. Med. Wochschr.にベーリング、北里の共著で発表された。後にベーリングのみがこれにより第1回ノーベル医学生理学賞を1901年に受けているが、これは当時の世界に於ける日本の地位が低かったことによるものであろう。

また特に筆者の興味を惹いたものに、1891年帰国に際し、パリでパストゥールを訪問したとき贈られた署名入りの肖像写真で“Au Docteur Kitasato, Souvenir et felicitation pour des beaux travaux, Louis Pasteur”とペンの跡は100年経っても鮮やかさを失ってはいない。実は1992年の本学会主催の「ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」でパリのパストゥール研究所博物館を訪ねた時、パストゥールが「北里は次代の細菌学を背負ってたつ一人だと賞賛していた」と案内の館員から聴いたが、展示物はまさにその裏付けとも

## 日本薬史学会・日本医史学会合同研究会

と き：1996年12月21日（土）午後  
ところ：順天堂大学医学部講堂

本学会では1993年度より、毎年12月に開催される日本医史学会月例研究会に共催参加することとし、末廣雅也理事による魚類インスリンおよびフグ毒関係の報告、更に山田光男理

事によるX線発見百年にちなむ報告がされました。

本年は、辰野高司理事による「衝心性脚気の病因論的研究——在来の黄変米の研究から衝心性脚気まで」が予定されています。

講演の後に開かれる懇親会は、故宗田一先生追悼の催しになる予定です。

### 宗田一先生ご逝去のお知らせ

本会名誉会員 <sup>ツダ</sup> 宗田 <sup>ハジメ</sup> 一先生は、本96年7月7日朝、心不全のため大阪府高槻市の病院で75歳の生涯を閉じられました。先生による解決が期待されている課題の山積している中で、誠に惜しい指導者を無くしました。

先生はわれわれ薬学史学領域の先達だったばかりでなく、日本医史学会の常任理事とし、近年は洋学史学会の会長として、日本近代化の時期における歴史研究を指導しておられました。

先生の業績は多面的で、薬史学の分野に限ってみても、日本の古代から中・近世、明

治以降～現代技術革新、中国・東アジア、西欧の薬学史……と、オールラウンドに及んでいました。

宗田先生は前進一方で、機会ある毎に新しい課題にとり組まれ、それを整理する時間を持たれませんでした。それらを整理することは残された同世代人の課題でしょう。

先生のお宅には資料類が棟一ぱいに満たされた書庫があります。その整理に協力するのも私たちの課題です。

心から先生のご冥福を祈ります (K)

(第3ページより)

言うべきものである。

明治41(1908)年、来日したコツホ夫妻歓迎に関連した展示では、6月16日歌舞伎座への招待にあたって北里が森に独逸文の筋書の起草を依頼していたのが奇麗な桜の花びらを散らした表紙で日本情緒豊かなものに出上りがっていた。(鷗外の日記によれば石井柏亭筆)

鷗外全集第26巻にその本文が Festspiele-Aufgefuert zu Ehren Robert Kochs im Theatrer Kabuki として「夜討曾我」(Die Brueder Soga)、「義経千本桜」(Tausend

Kirsch Bäume)、「二人道成寺」(Die Einweihung der Tempelglocke) が合計4頁にわたって記されているのを見つけたが、これは公務多忙な森が手近かな材料を集めて一晩徹夜して書いたが、特に西洋人の立場から史劇をみる時に第何世紀の出来事であるかということに関連して森が西暦何年の出来事かを書くのに苦勞したこと等も鷗外全集で窺い知ることが出来た。

本会会員には北里研究所、北里大学に關係して居られる方もあり、或は既に見学された方もあるかとは思ったが參觀の印象と展示品にまつわることについて記した。